パネルディスカッション

2024 年 9 月 21 日（土） 15：45 ～ 17：00
場所：認定こども園八戸文化幼稚園 アトリウム

保育の質を科学する－子ども学への示唆

コーディネーター： 安藤寿康 （慶應義塾大学 名誉教授）
パネリスト 1：中室牧子 （慶應義塾大学 教授）
パネリスト 2：藤澤啓子 （慶應義塾大学 教授）

【企画主旨】

保育や教育の世界には、子どもを健やかに育てようとする「温かい心」が満ち満ちている。その温かい心は子どもの豊かな未来像を能動的に予測し、それに向かう道筋として、保育環境・教育環境の創造と設計が日々なされる。この創造のプロセスで求められるのが「温かい心、されど冷静な頭」である。これは英国の古き経済学者マーシャルの有名な”Cool head, but warm heart”を並べかえたもので、言いたいことは同じであり、チャイルド・サイエンスたる子ども学が目指しているのもまさにこれなのだが、データから始まる経済学に対し、実践から始まる保育や教育でそれを実現するのはなかなか難しい。

この難しい営みに、いまわが国において最先端で取り組み、科学的成果を生み出しているのが、教育経済学の分野で「エビデンスに基づく教育・政策」を唱えて活躍されている中室牧子氏と、発達心理学の分野で長年にわたり大規模な発達調査研究に関わり続けてきた藤澤啓子氏がタッグを組んで実施しているプロジェクトである。保育の質と子どもの認知能力・非認知能力を、国際比較も可能な客観的・科学的指標を用いて、数多くの保育園で大規模に縦断的に評価し、その関連性を緻密に分析することによって、保育園の環境や保育士の日々の活動のどの側面が、子どものどのような心の発達と関連するのかを、これまでにない粒度で明らかにしつつある。これはまさに「温かい心と冷静な頭」たるべき「子ども学」研究の一つの範として、本学会に参加するあらゆる分野の人々に、多くの示唆を与えてくれるはずである。

【パネリスト 1】中室牧子（慶應義塾大学　教授）

「幼児教育の効果」

経済学では教育を「投資」だと捉え、人間が教育や仕事を通じて身に付けた知識や技能を「人的資本」という呼び方をします。私たちは、株や債券に投資をするのと同じように、教育を通じて人的資本、つまり「人」に投資をしていると考えるわけです。株や債券と同じように、人的資本においても「投資収益率」という概念があります。幼児教育への投資は割が良い投資なのでしょうか。最近の経済学の研究では、幼児教育の投資対効果は高いことがわかっています。認知能力と非認知能力は、両方が互いに影響しあいながら、将来の学歴や賃金に影響すると考えています。例えば、小さいころに勤勉さを身に着けた子どものほうが、のちのち学力が高くなりやすい、というようなことです。ノーベル経済学賞受賞者のシカゴ大のジェームス・ヘックマン教授らは、これを「技能が技能を生む」（skills begets skills）と表現しました。幼稚園・保育所、学校や親による教育投資は、就学前においても、就学後においても有効ですが、就学前の方がより効果的です。この理由は、ひとえに「技能が技能を生む」傾向があるからです。早期の教育投資によってたしかな認知能力や非認知能力を身に着けておけば、それが将来の教育投資の効果を更に高めてくれるというわけです。これを理由に、ヘックマン教授らは、貧困や病気などで困難な状況にある子供たちを救済しようと考えるのであれば、なるべく早期に投資を行うべきであると主張しています。子どもたちが大人になった後の「所得再分配」（社会保障給付などを通じ、所得の高い人から所得の低い人へ移転すること）よりも、困難な状況にある子どもたちに対して質の高い幼児教育を提供するという「事前分配」のほうが社会としては割のよい投資になると主張しています。

【パネリスト２】藤澤啓子（慶應義塾大学　教授）

「幼児教育・保育の質にまつわるエトセトラ」

幼児教育・保育の「質」について、どのようなことをイメージするかは、幼児教育・保育に対する見方や関わりの立場などによって、人それぞれだと思います。そのため、幼児教育・保育の質と子どもの発達との関係を考えるとき、問われるその「質」とは何なのかが整理されることは、「質」の評価や向上、担保について議論する土俵づくりとして重要です。また、その議論のさらなる前提として、幼児教育・保育が何のために、何を目指しているのかという、目的に関する問いがあることを私たちは認識しておく必要があるでしょう。

ガート・ビースタの教育研究におけるエビデンスに関する論考 (Biesta, 2020; 亘理ら訳 ,2024, 明石書店) は、幼児教育・保育研究におけるエビデンスについて考えるうえで示唆に富むものです。乳幼児期に良質な幼児教育・保育を経験した子ども達が、何らかの望ましい発達を見せたという「エビデンス」があるとして、その「エビデンス」は、今の時代、これからの未来を生きていく子ども達の育ちをどのように支え、導くかという課題解決に対する答えをもたらすものではなく、課題解決のためのヒントないし仮説を与えてくれるにすぎないものとも言えるでしょう。

幼児教育・保育の日々の実践の場には、保育者と子ども（どんなに小さい赤ちゃんであっても）それぞれが、主体的行為者として思考し、感じ、行動しているという意味で関与しており、その主体的行為者たちの関与によって次の実践のありようが定まっていくものと思います。このような見方で幼児教育・保育の場を見てみると、保育の質やその影響に関する「エビデンス」をもとにした実践を現場に用いるということは、その場に存在する保育者や子ども達から、場に関与する主体的行為者としての立場を奪ってしまうことにならないだろうか、ビースタの論を参考にしながら、そうしたことも考えてみたいと思っています。